

# オスカー・ワイルドと 本間久雄博士

——メーソン・ライブラリーのデジタル化を記念して

実践女子大学で教鞭を執っていた本間久雄が、イギリス滞在中に購入した世界に唯一無二の貴重な資料である「オスカー・ワイルド新聞切抜帖」全17巻。そのデジタル・アーカイブ公開を記念し、香雪記念資料館で同時開催中の展示に寄せて19世紀末から20世紀初頭に活躍したオスカー・ワイルドについてのシンポジウムを開催しました。このコレクションの再解釈、そしてワイルドのジェンダーを巡る議論を通して、本間久雄文庫を次世代に受け継ぐ意義についても検討しました。



本間久雄とワイルドの次男ヴィヴィアン・ホランド  
(1928年) 本学図書館所蔵

講演

## ワイルドなイグアノドン

——メーソン・ライブラリーが照らす  
オスカー・ワイルド裁判の裏舞台——

膨大な「オスカー・ワイルド新聞切抜帖」の中から土屋先生の研究心が反応したのは、イグアノドンの絵柄でした。埋もれていた1枚の資料に光を当て、そこから知られざるワイルドの裁判にまつわるストーリーを構築する。まさに知的探究心がゾクゾクするような発表をしてくださりました。



### 土屋結城

実践女子大学文学部英文学学科准教授  
ヴィクトリア文学を専門とし、主にトマス・ハーディの研究論文を発表。

### 本当にクィーンズベリー侯爵が 書いたのか

「オスカー・ワイルド新聞切抜帖」は収集したスチュアート・メーソンにちなんで「メーソン・ライブラリー」とも呼ばれ、ワイルド存命中の1870年代からまさに彼が活躍していた時代のリアルタイムな資料を、小説、劇作、詩などあらゆる分野についてほぼ完璧にスクラップした資料です。その中でも特に私が気になったのがこのイグアノドンの絵で、非常に貴重な資料なのではないかと考えています。これは

どうい図版なのかというと、本間先生の著書『英国近世唯美主義の研究』で、こう言及されています。「この動物については次のような注がある。(中略)クィーンズベリーはこの付録を特に新聞から切り取り、折から中央裁判所にあったワイルドのもとに送ったそうで、つまりワイルドをこの怪奇な動物に例えて嘲笑いよとしたのである」。確かに図版を拡大してみると、「この1枚のリーフにはクィーンズベリー侯爵自身の手書き文字があるが、これは1895年5月に侯爵がワイルド宛てに送ったもの」という注があります。ただし、この注は誰がタイプしたのかは不明で、持ち主のスチュアート・メーソンが資料整理の際に打ったのかもしれない。

手書き部分は「若い男性にキスをするという狂気の沙汰に嬉々として向かうオスカー・ワイルドの祖先」と記されています。また、もともとの図版には「巨大な尻尾はイグアノドンが立っている時や泳ぐ時に使われる」というキャプションが付いていて、そのあとに手書きで「交尾にも」とあります。つまり尻尾を性器に例え、非常に卑猥になるような言葉が付け足されているのです。

### なぜ侯爵はワイルドを 忌み嫌ったのか

クィーンズベリー侯爵の三男アルフレッド・ダグラスとオスカー・ワイルドは同性愛関係にあり、ワイルド晩年の悲劇の発端となりました。二人が親密になったのは1892年ごろで、当時の英国では同性愛は犯罪とされていました。ワイルドはダグラスからウッドという男娼を紹介されるのですが、彼と関係をもっていたことなどが後の裁判で不利になります。しかもウッドはワイルドがダグラスに宛てた手紙をもとにワイルドを強請ろうとしました。

さて、クィーンズベリー侯爵の長男ドラムリンク子爵は1894年に死去。侯爵は大変なショックを受けるのですが、その死は事故とも自殺ともいわれ、同性愛疑惑の最中に獄に行つて銃の暴発で死にまし

た。そんなことから同性愛にふける三男ダグラスとワイルドに激しい怒りをぶつけるようになったのです。

1895年、クィーンズベリー侯爵は、ワイルドが通っているクラブに「ソドマイト」と書いた名刺を残しますが、これは同性愛者を示す非常に侮蔑的な言葉です。これを受けワイルドはついにクィーンズベリー侯爵を名誉毀損で訴えました。しかし裁判の過程で、例のウッドが持っていた手紙も公判中に読み上げられました。

「君のソネットはとてもすてきた。君のバラの花びらのように赤い唇が歌を奏でるためでなく、狂わしいほど情熱的な接吻のためにある。それはなんとすばらしいことか。君のほっそりとした輝く魂は情熱の詩の間を歩いている」。こうしてダグラスとの同性愛関係が明るみに出てしまい、情勢が不利となったためワイルドは訴えを取り下げます。その直後、ワイルドは同性愛の罪で逮捕、保釈期間を挟んで2回の裁判で有罪が確定し投獄されます。その間、ダグラスはフランスのルーアンに身を潜めました。

この名刺に書かれた「ソドマイト」を、イグアノドンの絵に書かれた手書きと照合してみると、確かによく似ています。掲載誌の「ザ・イラストレイテッド・ロンドンニュース」の日付は1895年5月18日で、ワイルドが保釈中の発行であることがわかります。その時、クィーンズベリー侯爵はワイルドにひとこと言ってやろうと、ワイルドを探すのですが見つかりません。どうやら次男のパーシー夫妻が彼をかかまっていたと思ひ込み、かねてから虫の好かなかったパーシーの妻ミニーに、イグアノドンのページを破ってワイルドの悪口を書いて送ったと侯爵自身が述べています。

以上のような経緯を踏まえて、再びイグアノドンの絵を見てみましょう。上部の手書きには「君のほっそりとした輝く魂」など、ワイルドが書いた手紙をもとにした表現が確かに見られます。真ん中には右方向の矢印が記されていますが、これはダグラスが身を潜めるフランスのルーアンの方角を示していて、イグアノドン(ワイルド)がそっちを向いて恋い焦がれるよ



「ザ・イラストレイテッド・ロンドンニュース」に掲載されたイグアノドンの絵。手書き部分がクィーンズベリー侯爵のものとする。(本学図書館所蔵)

うなまなざしを向けていると見立てたのでしょう。さらに下段の手書きの「一つ穴のムジナ」に加えて、性交を意味する非常にわいせつな言葉も付け足され、パーシーが「ミニにわいせつな手紙を送るな」と言っていたこととも合致します。

## イグアノンの正体

当時、ダーウィンが『進化論』を発表し、イギリス社会に大きな衝撃をもたらしました。その結果、進

化があるなら退化もあるのではないかという考えが登場します。さらにマックス・ノルダウが書いた『Degeneration (退化)』がワイルド裁判の2カ月前に英訳出版され、予言の書ではないかと言われました。「有機体は異常な影響下に置かれると衰弱し、その子孫は通常の形とは異なるものとなり、成長する能力もなくなり、亜種を形成する。そしてその性質は子孫に受け継がれる」と退化を説明しています。その退化の症状であるデカダンスは唯美主義者の

中に見ることができ、代表者はオスカー・ワイルドだと論じました。クイーンズベリーが退化の議論を知っていたかどうかわかりませんが、彼が書いた悪口も、そんな漠然とした不安を反映させているのかもしれない。

以上、本学のメゾン・ライブラリーにある画像から考察を進めました。まだ不明な点も多く、さらに調査が進むことを期待して、今回はそのご紹介ということで終わらせていただきます。

講演

# 『獄中記』とワイルドの同性愛受容の変遷

——イギリスとアイルランドの間で——

ワイルドの代表作『獄中記』の複雑な出版史を検討しながら、この作品がどのような読者を想定して書かれたのかを紐解きます。後半はイギリスと、ワイルドの生まれ故郷アイルランドのLGBTの系譜を概観しながら、この二つの地域でどのようにワイルドが受け取られてきたのか、その変遷を辿っていただきました。

## 本間久雄とオスカー・ワイルドをつなぐもの

本間久雄は1911年『早稲田文学』で、日本初となる『獄中記』のタイトルをつけて翻訳を掲載し、翌年、新潮社から単行本として出版しました。そして1928年、イギリス滞在中の本間はオスカー・ワイルドの研究者スチュアート・メゾンが残した蔵書、本学の「メゾン・ライブラリー」をデュラウ書店で購入しました。その縁で書店を介してワイルドの次男ヴィヴィアン・ホランドと引き合わされます。彼は本間のワイルドに対する熱意に感銘を受け、『獄中記』の文言が削除されていないバージョンの閲覧、原稿の書き写しの許可、さらに今回展示されたワイルドの遺髪を寄贈したのです。

## 複雑な『獄中記』の版

オスカー・ワイルドは同性愛の罪で有罪を宣告され、1895～97年までの2年間レディング監獄に服役。その間、嘆願書や詩、そして『獄中記』の元になるいくつもの手紙を書き、これらは現在プリズン・ライティングと総称されます。

その中で特に、同性愛の恋人だったクイーンズベリー侯爵の三男アルフレッド・ダグラス卿に宛てて書かれた書簡が、ワイルドの死後に遺産と遺稿の管財人に指定されたロバート・ロスの編集を経て、1905年に初めて『獄中記』として出版されます。裁判の影響から同性愛を強く示唆するテキストにもかかわらず『獄中記』はよく売れました。

1949年には、ワイルドの次男ヴィヴィアン・ホランドが手書き原稿からタイプで書かれた写しをもとに、完本『獄中記』と銘打って出版。さらに1962年に編集者、ルパート・ハート・デイビスが大英博物館に保管されていたワイルドの原稿を正確に文字化した『オスカー・ワイルド全書簡』を刊行します。ハート・デイビスはもともと、『獄中記』がワイルドによってダグラスにあてて書かれた手紙であるという側面を重視。書簡全集の一部に『獄中記』の手書き原稿を加え

ました。さらにヴィヴィアンによる1949年版にあった数百の誤植を指摘し、自らのテキストの正確性、正当性を主張しました。そうすることで、この『獄中記』の完成版を巡る問題は、終了したかに見えました。

## 『獄中記』は誰に読まれると想定したテキストなのか

2005年にイアン・スモール編集による新たな『オスカー・ワイルド全集 第二巻 獄中記』が出され、『獄中記』のテキストを巡る問題が再燃します。スモールによれば、1962年のハート・デイビスによるロス版、ヴィヴィアン版の否定はやや性急すぎた面があり、『獄中記』を書簡集に収めようと、このテキストを作品として広める機会を奪ってしまうことになる。さらに、将来的に作品にしようとしていたふしがあるワイルドの意図に反していると主張します。

つまり、ダグラス宛てに書かれたプライベートな手紙と取るか、他の誰かに見せるべき作品の草稿と取るかで、テキストに対する態度が分かれてしまうわけです。このダグラス宛ての手紙をスモールは、「部分的な公開書簡」と呼び、ワイルドの未完作品として扱われるほうがいだろうと論じました。従ってスモールは、今回の新しい全集として、手書き原稿を参照しつつ、古いロス版(1905)、ヴィヴィアン版(1949)を底本とする編集方針を取っているのです。

「部分的な公開書簡」という見方はいくぶんこのテキストの性格を言い当ててはいるものの、やはり疑念がつかまいます。それはスモールが見落としている『獄中記』の同性愛的な面です。ワイルドはこの同性愛的なテキストが公開されて再び訴えられることを恐れていたものの、気心の知れた女性の友人二人にだけは原稿を送るようロスに指示しています。彼女らならば、同性愛の関係にあった男性に対する罵倒や愛情表現などが充満していたこの手紙を男色の罪で告発する心配はないと考えていたようです。つまりこの手紙の公開範囲は、宛名である同性愛者のダグラス、そして編集を任されたロス、また、二人の女性の友人までに制限されており、一般

## 諏訪友亮

実践女子大学文学部英文学科専任講師  
アイルランドの文学、文化、英語圏の詩などを専門として研究。



の読者に向けては公開を想定していなかったと考えられます。

ワイルドの愛は「あえて名前を名乗らぬ愛」。これはダグラスの詩の一節であり、ワイルドも手紙の中で引用し、当時の同性愛の一つの特徴と捉えられるものです。まさにそれは「名指されぬ愛」とどまらう望んだのです。

## イギリスとアイルランドでワイルドはどう評価されたのか

19世紀イギリスの同性愛者に対する引き締めは、従来思われていたほど苛烈ではないことが知られ、当局は同性愛者に刑罰を加えることに積極的ではありませんでした。にもかかわらずワイルドが厳しく罰せられたのは、公然の秘密であった彼の性的指向が、裁判という公開の場で晒され、一大スキャンダルへと発展したためと言えます。イギリスにおいてワイルドは長らく作家として再評価されず、1960年代のワイルド全書簡の出版や、同性愛の合法化を経て、彼の同性愛も正面から受け止められる流れが作られました。

対して、アイルランドでは、ワイルドと同時代の作家たちが自らの疎外された立場を重ねるようにワイルドを評価して以降は、劇作家ミホール・マクリアモーによるワイルド作品の上演やワイルドを主人公にした演劇によって、作家、アーティストとして認められる傾向は続きました。

そして同性愛の合法化が1990年代と遅れたものの、現在では同性婚も認められ、ゲイの政治的リーダーが誕生するなど、急速に同性愛の権利獲得が進むに及んでいます。その中で、ワイルドの性をめぐる議論もオープンになり、ワイルドはアイルランド人であると同時にイギリス人でもあり、さらにゲイでもあるといういくつものアイデンティティが交錯する主体として認知されるようになってきました。ワイルドの同性愛はタブー視され、あえて「名乗らぬ愛」だった状態から、ようやく「名乗られる愛」になったと言えるでしょう。

質疑

応答



Q オスカー・ワイルドについての貴重な資料をどのように活用する考えですか？

A

土屋・諏訪 遺髪をはじめ貴重な資料の展示が実現したのは、日本では十数年ぶりです。今後はワイルド関係の国内外の団体と協力しつつワイルド研究に役立て、展示やイベントがあれば資料の貸し出しなどを通じてご覧いただく機会となればよいと考えています。



ワイルド遺髪



オスカー・ワイルド  
新聞切抜帖